～これからの事業・施策の展望を～

①市民ニーズ、農家ニーズが一致した　協働できる事例

②全国の先進地の事例

＊こういった事例をもとに、市民・農家で合致した、協働関係がとれるものを検討する

【資料１】【資料２】

A　貸農園、市民農園型事業

B　地産地消推進型事業

C　農地保全型事業、休耕地対策型事業

D　援農型事業

E　体験農業型事業

具体化に向けて----

１．〈援農施策〉

C　農地保全型事業、休耕地対策型事業

D　援農型事業

☆援農ボランティアのようなシステム→貸農園での栽培程度では満足出来ない層のニーズは高いと思われる

☆観光の要素として　（例）暗峠、棚田：水稲農家３軒　全部で２ha 程ある

紹介していけば議論深まるのではないか

☆シルバー人材センターや、学校・団体との連携などは

２．〈農業体験学習・ツアー〉

E　体験農業型事業

上記①②同様、受入れ・手上げ農家はあるのか？

１．２．に関して

サポーター制度は必要か？→高齢農家が増加している

☆サポーターは①公募型

②シルバー人材センター、雇用開発センター等へ委託型

☆ボランティアか有料か

☆作業内容の選択制が必要では

①技術・専門性が必要なもの
②（単純な）作業支援を期待するもの

☆サポートする期間、時期は
①恒常的あるいは一定期間をサポートするのか
②特定の作業、あるいは農繁期や期間を限定した支援か

サポーター制度を実施するには

＊農家にとって、有効な制度でないと根付かないのではないか

☆援農受入れ希望農家と援農者を紹介、マッチングしていくシステム、ネットワークが出来ないか

☆受入れ希望農家を把握する作業がいるのではないか
（援農・サポートの受入れを希望する農家はどれ位あるのか）

☆サポート出来るメニューを農家にアピールすることによって農家の需要がでてくるのではないか

☆市民サイドに向けた研修や取組み、人材育成などの取組みは出来ないか

☆制度、システムづくり→市とＪＡが連携した、農家と市民とを繋いだ施策は出来ないか

＊サポート側の多様なレベルと、農家の多様なニーズを把握して、運営するシステムは可能か

農業体験・学習型プログラムで援農につなげる事業は

☆市民・消費者の農業体験型事業や、食育・体験学習型事業は

３．〈地産地消型施策〉

Ｂ　地産地消推進型事業

☆東大阪の地場農産物の消費・購買・守り育てる施策は

４．〈貸農園推進施策〉

Ａ　貸農園、市民農園型事業　　【別紙１】

☆ＪＡが窓口となる市民農園が増えれば好ましいが

☆人材を募って、研修　修養者を育成するシステムは出来ないか
・府 OB 職員、JAOB 職員等で⇒JA の貸農園への出前講座など

―　今後の展開に向けて、どう進めていくか。議論の深まるやり方　―

（案）今日の検討をふまえ、次回部会は３月に開催し、市内農業・農地などの見学ツアーを実施してはどうか